

町民の健康問題の抽出と健康づくり計画の策定

栗田孝子 奥井幸子 会田敬志 篠田征子 小澤和弘 堀ひろみ (大学)
泉五十鈴 川瀬友代 荻谷成美 野田千佳 川口寛子 (川島町)
和田明美 (岐阜地域保健所健康増進課)

I. 共同研究に至った経緯

平成13年の学外演習の機会に川島町保健師より、今まで保健予防活動を展開しているが、結果が客観的指標として現れてない、町村合併を視野に地域の健康問題を明確にしたい、地域の健康問題に対応した保健予防活動を大切にしていきたい、という思いを本学教員に持ちかけられた。講座及び川島町と検討した結果、学習会を行い共通認識に立ち、対等の立場で地域の健康問題を抽出することと、健康なまちづくり計画づくりについては2年間計画で進めることの合意ができ、今年度から共同研究を開始した。

II. 目的

住民をパートナーとして地域で生活する上での健康問題を明らかにし、住民とともに健康な街づくり計画を策定する。

14年度は健康問題の抽出とし、15年度は計画づくりとする。

III. 共同研究の経緯

1. 学習会の実施とモデルの選定

コミュニティアズパートナーの抄読会を4月から7月まで6回実施。これを川島町の健康づくり計画策定のモデルとして活用することとした。

これをモデルとした理由は、地域をパートナーとしていることや住民をコアとして8つのサブシステムが人々の健康に相互に影響しているという考え方であり、この考え方はヘルスプロモーションと合致すること、現実的に利用できるものであることや講座でも学習の経験があった等から選定することとした。

2. 川島町の実態に関するヒヤリングと討議

7月から8月までに4回既存の資料による川島町実態について検討をした。

3. 住民の声を反映する調査項目の検討

8月から11月までに7回、調査項目の検討を重ねた。

4. プレテスト及び調査の実施

15年1月15日から2月10まで調査期間とした。

IV. 川島町の実態

1. 川島町の理念・目標

川島町は2001年度を初年度とする総合計画の中で将来像を描き、その将来像に向かっての5つの目標を掲げている。その第1が「心身とも健康で生きがいに満ちたまちをつくる」ことであり保健センターを中核に健康づくりに取り組んできたが、本研究の取り組みの動機となっていることもあり、学習会を重ねる中で大いに議論し、「心身ともに健康で生きがいに満ちたまち」が川島町のあるべき姿であり、具体的には①若い頃から自分の健康を考えられる人づくり、②一人ひとりの健康観、健康に対する価値観をもつ人づくり、③自分自身の健康状態を正しく理解し、生活習慣をコントロールできる人づくりを具体的目標にすることを明確にし、共同研究者全員で確認した。この目標に向かい以下の分析を行った。

2. 既存の資料の分析

1) コア (歴史、人口統計、民族性、価値観と信念)

①人口ピラミッドでは、50～54歳の第一次ベビーブーム世代が、他の世代に比べ突出している。現在は、65歳以上の人口は1,478人であるが、平成7年の死亡状況が続くと過程すると、10年後(平成22年)には65歳以上人口が約1,000人増加すると予測され、今後、福祉サービスや介護保険サービスの受け皿の確保や、住民同士が支えあえるまちづくりが望まれる。地域の人々は、10年後をどのように捉え、何に不安を感じているのかについて健康に関する意識調査で把握したい。

②平成3年からの10年間の粗死亡率は、5.4～8.4(平均6.8)で推移しており、おおむね羽島郡より高く、岐阜県より低い傾向にある。標準化死亡比(H5～H9)をみると、全死亡の標準化死亡比が男女とも県下のワースト10位以内である。疾患別標準化死亡比(H5～H9)をみると、特に悪性新生物(胃)が男女とも多い。また、男性の急性心筋梗塞、女性の脳血管疾患が多い。

③平成11年の離婚率は1.54で、増加傾向にある。また、男親と子どもからなる世帯や、女親と子どもからなる世帯も増加傾向である。今後益々、「地域で子育てをする」という意識の普及と現実的な対応が求められる。問題に応じて、町内の保健センター、保育所、幼稚園、小学校、中学校が連携し、対応することが求められるので、現在の連携会議を維持し、機能強化していく必要がある。

2) サブシステム

(1)保健医療と社会福祉

①H11～12年に悪性新生物(胃)での死亡者は全て過去4年間町での胃がん検診を受診していなかった。上記1)の②も受け、現在実施している健康診査、各がん検診、健康相談、健康教育の見直しの必要性が示唆された。

②基本健康診査結果では、若い男性の総コレステロール、中性脂肪、血糖値が高い。また、全体に要指導、要医療者の割合が高い。

(2)物理的環境

①川に囲まれた中州の町で自然豊かな緑地や野鳥の多い町である。

②河川環境楽園ができ、町全体が公園化し交流の町を目指している。

(3)経済

①農業は少なく町内の産業としては製菓会社エーザイと燃糸・織物を地場産業としている。

②10人未満の事業所が370事業所あり、この人たちの健康問題は希望により町民と同様に対応している。

③商店数は増加しているが1商店当りの年間販売額は減額になっており、消費が冷えている実態が伺える。

(4)安全と交通

①火災の発生10件以内、救急出動250件程度、非常時の消防は役場職員が対応する場合がある。消防と救急の同時発生は対応しきれず他町の応援に依存している。

②周囲を川に囲まれた立地の特徴から、町外へアクセスするためには必ず橋を渡る必要がある。増水すると水につかる橋が過去に存在し、幅が狭く歩行者や自転車にとって危険な橋もあるが、徐々に整備されつつある。今後いっそう、住民の安全と利便性が保障されるまちづくりが求められる。

(5)政治と行政

①「健康」「学習」「自然」を大切にしている。

②人口、世帯数ともに少しずつ増加しているが、町税は減少傾向にある。

③10年後、65歳以上人口が約1000人増加する

ため、町税収入が増加しないと住民の行政需要に応えきれなくなる可能性がある

(6)コミュニケーション

①住民の手に届く広報は月3種類。保健センターよりは月1回発刊。住民と協働するための情報は適切に提供されているか。

②ボランティア等の教育が活発になされているが、ボランティア活動の考え方や行動の精神はどのような考えに基づいているのだろうか。

(7)教育

①3歳未満児等の保育園児が増加傾向にあり「たくましい頭脳」「裸の保育」を方針に保育している。

②小・中学校は各1校で生涯に渡る仲間作りの出発点になっている。健康上の問題は心疾患管理必要者が若干いることや小学生の歯肉炎があるが長期欠席者はいない。

③社会教育は活発(29項目)で、なかでも高齢者学級や子育てに関する親の集まりへの参加が多い。学級終了後の社会活動への発展はあるのだろうか。

(8)レクリエーション

3. 健康に関する意識調査

1) 目的

既存の資料の分析で明らかになったことをもとに①若い頃から自分の健康を考えられる人づくり、②一人ひとりの健康観、健康に対する価値観をもつ人づくり、③自分自身の健康状態を正しく理解し、生活習慣(食生活)をコントロールできる人づくりを具体化する上での住民の考え方、行動を知る一段階とする。

2) 調査方法

質問紙による調査

3) 調査対象

住民の性・年齢による層化無作為抽出1000名

4) 調査期間

平成15年1月15日～2月10日

5) 調査内容

(1)属性に関する事柄(性、年齢、居住年数、住居地、同居人数、同居者及びその年齢、同居者の介護等の状態、仕事及び仕事上での休暇、住宅の状況、現在の疾病)

(2)住民の価値観(次世代に残したいもの、暮らしの中で大切に思うもの)

(3)健康状態(気になること、ストレスと解消法、「健康」とは、1か月間の健康状態)

(4)健康診断やがん検診(受診の有無と受診の種類、健診の受診による生活習慣の変化、受診の間隔、胃検診の受診の有無とその結果、胃検

診の間隔, 未受診の理由, 大腸がん検診の受診の有無とその結果, 大腸がん検診の間隔, 未受診の理由, 肺がん検診受診の間隔)

(5)日頃の生活習慣(朝食の摂取状況, 間食の摂取状況, 夜食の状況, 食事の仕方, 食事内容, 飲酒の有無と飲酒量, 喫煙の有無と喫煙状況, 暮らしの中での運動と目的, 定期的な運動の有無とその理由)

(6)歯(本数, 歯磨きの頻度と時期, 歯間ブラシの使用とその頻度, 歯科健診の有無, 歯石の除去の有無)

(7)健康情報の情報源

(8)助け合いと将来に向けて(1年間に手助けしたことの有無と事柄, 1年間に手助けを受けたことの有無と事柄, できそうだと思う手助けの事柄, 現在暮らしの中で困っている事柄の有無と内容, 5年後を考えて困り事や不安の有無とその内容, 将来に向けて準備していること)

(9)女性を対象に子宮がん検診受診の有無と受診の種類, 検診結果, 受診の間隔, 乳がん検診の有無と受診の種類, 受診の間隔, その結果, 以上9項目延べ72の質問(女性は80)

6)回収率

平成15年2月10日現在, 回答者499名(49.9%)

7)結果の概要

調査期間が2月10日までであったので2月10日までに着信したものの素集計の概要を以下に示す。

表1 性・年齢別回答者数

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	計(人)
男	31	45	45	65	47	233
女	38	54	59	69	46	266
計(人)	69	99	104	134	93	499
割合(%)	13.8	19.8	20.8	26.9	18.6	100.0

表2 居住年数

	男	女	計(人)	割合(%)
10年未満	43	52	95	19.2
10~20年未満	29	47	76	15.3
20~30年未満	51	68	119	24.0
30~40年未満	28	57	85	17.1
40~50年未満	26	18	44	8.9
50~60年未満	32	13	45	9.1
60年以上	22	10	32	6.5
計(人)	231	265	496	100.0

表3 次世代に残したい・伝えたいもの

	男	女	計(人)	割合(%)
水のきれいな川のある町	57	47	104	21.5
緑や自然が豊かな町	101	123	224	46.4
まつり、資料館などの文化を大切に する町	2	5	7	1.4
観光や産業の盛んな町	12	7	19	3.9
人々の交流がある町	12	24	36	7.5
助け合いができる町	26	40	66	13.7
その他	19	8	27	5.6
計(人)	229	254	483	100.0

表4 暮らしの中で大切に思うもの第1位

	男	女	計(人)	割合(%)
衣食住が安定していること	26	19	45	9.2
健康であること	132	175	307	63.0
安全に暮らせること	14	8	22	4.5
経済的に安定していること	13	10	23	4.7
家族が仲良く暮らせること	33	39	72	14.8
地域の活動に参加できること	1	1	2	0.2
仲間、友人と楽しい時間を過ごすこと	3	2	5	1.0
生きがいを持てる仕事をする こと	5	1	6	1.2
社会に尽くすこと	1	1	2	0.2
自分のやりたいことができる こと	4	4	8	0.8
その他		1	1	0.2
計(人)	232	255	487	100.0

表5 「健康とは」どのような状態か・考えに近い第1位

	男	女	計(人)	割合(%)
寝たきりや痴呆でないこと	23	27	50	10.2
治療中の病気や障害がないこと	27	51	78	16.0
気になる自覚症状がないこと	15	22	37	7.6
心の悩みや精神的不安がないこと	19	20	39	8.0
健康診断や人間ドックで異常がないこと	19	20	39	8.0
毎日の生活を送るのに支障がないこと	35	27	62	12.7
健康について意識しないこと	19	12	31	6.3
毎日充実した日々が送れること	61	69	130	26.6
近所づきあいや地域、職場など社会の 付き合いができること	2	3	5	1.0
人生でやりたいことができる状態に あること	11	7	18	3.7
計(人)	231	258	489	100.0

表6 過去1年間に手助けや協力したことがあるか

	計		割合*	
	男	女	(人)	(%)
手助けや協力したことがない	117	115	232	53.5
遊び相手や話し相手になった	20	50	70	16.1
相談や助言をした	18	34	52	12.0
入浴、食事などの手伝いをした	9	15	24	5.5
掃除、洗濯などの家事の手伝いをした	18	20	38	8.8
食事や野菜のおすそ分けをした	15	50	65	15.0
外出の手伝いをした	26	21	47	10.8
川や道路の環境美化をした	37	35	72	16.6
グループ活動の手助けをした	9	10	19	4.4
計	(人)	152	235	387

注*回答者男 205 人、女 229 人、計 434 人に対する割合である

①499名の回答者は男性46.7%、女性53.3%であった。(表1)

②年齢別に回答者を見ると50歳代が26.9%、40歳代が20.8%、30歳代が19.8%、60歳代、20歳代の順であり、上位の30歳代から50歳代で約68%を占めた。(表1)

③居住年数は男女とも20年から40年未満が多く、41.1%で、女性では10年～20年未満、男性では40年以上の居住年数に性差が見られる。(表2)

④住民は緑や川など自然豊かな町を次世代に伝えたいと考えていた。(表3)

⑤暮らしに中で大切に思うものは健康であることが一番多く63%であり、次いで家族が仲良く暮らせることで14.8%であった。(表4)

⑥健康とはどのような状態かという問いに対し、毎日充実した日々が遅れることが26.6%、次いで治療中の病気や障害がないこと16.0%であった。(表5)

⑦過去1年間で手助けや協力したことについてはそのような実績がないと答えた人が53.5%であった。手助けや協力した人は川や道路の美化が16.6%、遊び相手、話し相手が16.1%、食事のおすそ分け15.0%等であった。(表6)

V. 討論の会での意見交換

1. フロアーからの感想

(A村)住民をパートナーとした考え方がすばらしいと思った。

(B市)これまで、感覚的に保健事業に取り組んできて、数字で客観的に見てこなかったことが明確になってきた。統計の勉強もしていきたい。

(A村)合併に向けて保健分野に関する様々な資料をそろえている最中である。記録は昭和30年代から残されているが、数字で評価できない。5年間の中期計画をたてるなどして、評価できるよう意識してきたつもりだが、客観的な評価の部分が弱いと実感している。見直しの必要性を感じている。

(川島町)数字でみたことで、推測だったものが客観的に明らかになった。また、これまで地域の分析といえば保健、医療、福祉に視点が限られがちであったが、コミュニティアズパートナーモデルを用いたことで、健康には様々な分野が影響しあっていることが実感できた。今回の分析や健康に関する意識調査の結果をもとに、合併後、「当町はこういう特徴のある町です。」と町民の声を代弁していきたいと思っている。

2. 質疑応答

1) 町民の健康意識に関する調査では、どこに重点を置いたのかという質問があり、町在住年数によって町に対する思いや保健活動への意識に差があるかどうかを見たいと思ったこと。また、コミュニティアズパートナーモデルにもとづいた分析の中で、町民の大切にしているものは何かという大学からの質問に答えられなかったことは町保健師にとって大きな衝撃であり、今回の調査で住民の価値観に関する調査項目を重要視していることを回答した。

2) 住民とのディスカッションをどのように企画していくのかについて質問があり、このためだけに住民に集まっていただけでなく、老人会や子育てサークル、青年料理教室など、住民の集まっているところへ出向いて声を聞きたいと考えていること、また、学外演習などを利用して、小学校での情報収集をするなど、新たに設定するのではなく、既存のあらゆる機会を利用して住民の声を幅広く聞いていこうと考えていることを報告した。

VI. 今後の方向

既存の資料等で明らかになったことに加えて今回の健康に関する意識調査を集計し、十分な検討を加えた上で、住民、関係機関・グループ、専門職と交流を持ち、様々なニーズや意見を集約し、お互いの役割が果たせるような具体的な実行計画づくりをめざしたい。